

教 仁 名 聞

第1号
(発行日)

2010年10月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

皆 当 に 過 去 す べ し

異常気象といわれるような

高温の夏が過ぎ、やっと涼しくなった。涼しい秋の空気にひたついていると、移りゆく人生の悲哀感が胸にわくのを毎年この時期になると感じる。

この八月下旬、子供夫婦と孫四人、総勢十人が二台の車に乗って、兵庫県の一帯に位置する竹野海岸に海水浴に出かけた。昼頃、海岸近くにある国民休暇村のホテルに入り、午後は孫の海遊びを浜辺で荷物の番をしながら見ていた。ホテルに帰って、露天風呂に入り、湯舟から日本海を眺める。老年になると露天風呂に眺めるのはやはり気持ちのいいものである。夜はみんなでバイキング。食後、一室に集まり子や孫たちと雑談に花を咲かせる。翌朝、五時半頃起きて夫婦で周りの林の散歩道をゆっくり歩き、帰ってからまた朝風呂につかる。朝食を頂いて部屋で布団の上で横になる。「ああ、これがこの世の極楽なんだ」という思

いが湧く。

私たちが夫婦はどうか元気であり、子や孫も元気だし、生活はなんとか出来て、しかもお互い仲良くしている。これ以上のこの世の幸せはあるべくもない。

けれども、この世の極楽はまことの極楽ではないからすぐに過ぎ去り、ホテルを出る時には既にすべては思い出になってしまっている。『無量寿経』の下巻には「皆当過去」(みなまさにと過去すべし)と説かれているが、どんなこともすぐに過去へ過去へと移ろいゆく。この世の楽だけではないいろいろな苦も同じく過去へ過去へと過ぎ去る。平成七年一月十七日未明、家がつぶれるのではないかと思つた阪神大震災の悲惨な出来事もすでに遠い思い出としてしまっている。このように一瞬の出来事もすぐに過去へと流れ去り、死ぬ時にはこの世そのものが過去化する。

そうすると、私たちが日々おつかけている幸せは、たとえそれが手に入っても、すぐに抜け去っていく。

つかんでもすぐに離れてしまふのである。満月の満ちるのはひと時でたちまち欠けはじめるようなものである。

要するにこの世の幸せは苦勞してつかんでも、それを留めておくことはできない。太閤秀吉が辞世の歌に「つゆとおち つゆときえぬ わが身かな なにわのことは 夢のまた夢」と詠んだことはよく知られている。なにわのこと、すなわち大阪城での栄華は留まらな

い、皆過去へと露のごとく夢のごとく消えていくのであるという臨終まじかの念いは、恐らく彼の実感であろう。

よくいわれる「夢のような人生」とか「はかない人生」とか「むなし人生」といわれる人生は、特別な人の人生のすがたではない。私たちの人生そのものが実際、結局何も残らず、求めた幸せも留まらず、皆思い出になり、過去へと過ぎ去っていく「はかない人生」である。「人生夢の如し」とはそういう人生全体を言い表した言葉であろう。一生懸命に、それこそ真面目に生活してきた人生も、所詮「夢のまた夢」であるというのが真相であろう。

こうした一瞬一瞬に流れ去って行く日々の人生において、決して過去へと流れ去らず、常に留まり続けるような真実はないのであろうか。(それがあつたのだ)と説いて下さつたのが釈尊であり、

《 念 佛 寺 報 恩 講 》

十二月二十二日(水) 午後二時始

講師 能登教区・清琳寺住職 法 岡 龍 夫 師

*なお、十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

私たちにとっては『仏説無量寿経』の教説である。

そこに説かれているのは、私どもを撰取して下さる南無阿弥陀仏の真実である。仏心大悲のまことである。業煩惱の私の心にひとたび、阿弥陀仏の大悲の御心が届くと、不思議にもそれはもはや決して私の心を離れない。いつも私とともにある、有難い不思議なまことである。

たとえ、この世の生命が尽き、土地や家からも、子や孫や知人からも、自分の肉体からも離れ去っても、仏心は私の心を離れない。しかも死を縁として私の心を仏心と一つになして下さるとお聞かせいただいている。有難いことである。

南無阿弥陀仏は私に働きかけ、私を撰取して離れ給わないまことそのものであるが、こういう南無阿弥陀仏の真実とのであいによって、空しい人生は実のある人生となる。もしこの真実がなければ、人生は「皆まさに過去す」る空しさをまぬがれないであろう。

正信偈に学ぶ問答

(三十一)

能発一念喜愛心

不断煩惱得涅槃

凡聖逆謗齊回入

如衆水入海一味

(書き下し文)

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。凡聖、逆謗、ひとしく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるがごとし。

(現代語訳)

信をおこして、阿弥陀仏の救いを喜ぶ人は、自ら煩惱を断ち切らないまま、浄土できとりを得ることが出来る。凡夫も聖者も、五逆のものも謗法のものも、みな本願海に入れば、どの川の水も海に入ると一つの味になるように、等しく救われる。

*

D 「次に、
凡聖、逆謗、ひとしく回

入すれば、衆水、海に入りて一味なるがごとし

のところですが、これについては聖人ご自身が『尊号真像銘文』に

凡聖逆謗齊回入というは、小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闍提みな回心して、真実

信心海に帰入しぬれば、衆水の海にいらりて、ひとつあじわいとなるがごとしとたとえたるなり。これを如衆水入海一味というなり

と註釈しておられます」

G 「凡聖は凡夫も聖者もということであり、逆謗というのは、凡夫の中での逆と謗、すなわち逆は五逆という重い罪を造る者であり、謗法といって仏法を否定する者のことですが、これらを敢えてここであげておられるのはなぜですか」

D 「弥陀の本願は、罪悪の重い者にことに焦点を当てて、いわゆる一番底に手をさしおいて、一切の衆生を救おうとされています。そのお心を表されるためでありましょう。すべての者を乗せる船は、五

体が元気で泳ぎの達者な者よりも、足も腰も立たぬ泳ぎの全く出来ない者を乗せる船であればこそ、全ての者を乗せて向こう岸に至らしめることが出来ます。そのようにことに罪の重い逆謗の者をあげて、それらを救う法において凡夫も聖者も、万人が共に救われる法であることを鮮明にされるのでありましょう」

G 「では、凡聖の聖とはどのような者のことでしょうか」

D 「聖は聖者のことですが、これを宗祖は小聖の者と註釈されています」

G 「小聖とはどういう意味でしょうか」

D 「まだ仏になつてはいませんが、自力の修行によって煩惱を克服した者、あるいは煩惱の浄化がある程度出来た者のことでしよう。いわゆる預流果・一來果・不還果・阿羅漢果といわれるようなさとりを得られた、あるいは得ようとしておられる小乗の聖者のことを考えれば分かりやすいと思います」

G 「しかし、そういう聖者は弥陀の本願によって助けられる必要はないように思いますか」

D 「小乗の聖者であつても、自力(自分を救う)はできても利他(他を救う)となると自分の力は到底及ばぬとなり、自力の限界を感じて、自利他の徳を完成して下さる弥陀の本願をたのむということもあるのではないのでしょうか。私はその様に受けとっていますか」

G 「次に、齊回入とは、ひとしく回入すれば」ということで、回入ということを宗祖は(回心して、真実信心海に帰入)することとおっしゃっているのですが、これはどういう意味でしょうか」

D 「回入とは回心して信心の世界に入ることで、回心とは心をひるがえすことです」

G 「心をひるがえすとは」

D 「それについては『歎異抄』に、
日ごろのころにては、往生かなうべからずとおもいて、もとのころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、回心とはもうしそちらえとあります」

G 「日ごろの心とかもとの心とは」

D 「ふだんの私たちの心です。

(了)

日ごろの心をひきかえて、本願をたのむのを回心といわれるのです」

G 「そこをもう少し詳しく説明してください」

D 「私たちの思いや心がけや考えや心の善し悪しというような、私たちのどんな心（日ごろの心）も、浄土に生まれる種にも力にも全然ならないと知って、こんな者に、（そんなお前だから私がまるまる引き受ける、助ける）と仰せ下さる阿弥陀仏の大悲の誓いをたのむのを回心というのです。心をひきかえてというのではひるがえしてということですよ」

G 「私の日ごろの思いや考えをひるがえして本願をたのむのを回心というのですね。ひるがえすところをもう少し具体的にお話して下さい」
D 「たとえば、私たちは自分の考えや思いを本にして、そこから判断して物事に対処しています。ところが生死出離の大問題になると私の考えも思いも全く役に立たず、手が及びません。出離の問題とは例えば（私は結局どうなっていくのか）というような問題で、こういうことにたいして、

私たちは道がつかないのです」

G 「私が結局どうなるかは」

D 「端的に言えば（私は死んでどうなるのか）（私は結局どこへいくのか）という問題です。死を前にすると、こういう私の行く末に対して今までの考えでは対処ができません、（分からない）（不可解）という結論になります。では分からなくてすむかといえ、死に対して、死は不可解であり、わが身の行き先の不安となり、怖れとなり、死の闇は今までの人生全体を（夢物語のように空しい）ものにしてしまします」

G 「死の問題は死ぬときだけの問題ではないのですね」

D 「ええそうですね。死の問題は現在の生の不安定、いわば不安の問題であり、また死は私の人生全体を（無化）してしまいうようなものとして立ちあらわれます。自分の死を前に置くとき、人生そのものが（はかないもの）（むなしなもの）として感ぜずにはおれなくなるのでしよう」
G 「そういう死を前に置き、私の今までの考えは全く役に立たず、ただ不可解さ、

分からなさにたたずむほかになくなるのですね」

D 「ええ、そういう自分の考えがまったく間に合わず、力が及ばないと知らされる。そういう生き死にの根本問題にぶつかる私の日ごろの心は全く無知であり無能であると知らされます」

G 「そういう壁にぶつかるときにどこに救いがあるのでしょうか」
D 「救いを弥陀の本願として、釈尊は『仏説無量寿経』にお示し下さいました」

G 「生死の問題に苦しむ私が弥陀の本願を聞くときに救いにあうのですね」
D 「ええそうですね。へ汝を引き受けて浄土へ連れて行くから、我をたのめ」という阿弥陀仏の本願の仰せを聞いて、日ごろの私の思いや考えをさしおいて仏のみ言葉に順うこと。そのことを回心と申します」

G 「そうすると、生き死にの問題にたいして自分の考えや心のありようでは決着がつかないと見限って、阿弥陀仏の（汝を助けるからわれをたのめ）との大悲のみ言葉に身をゆだねること、それを回心と

いうのですね」

D 「ええそうですね。ただ、（私はかしこい）（私の考えは確かだ）（私は物事をよく分かっている）という自己信頼の心が強い現代の人にとつて、自分の考えをまったく当てにせず、ただ単純に仏様のお言葉に信順することは容易ではないですね」

G 「では、阿弥陀仏をたのむ回心は死の問題についてだけにあるのでしょうか」

D 「いえいえ、死の問題は弥陀をたのむ回心がなされる典型的な縁の一つであって、それだけではありません。煩惱や罪の問題、あるいは人生の無意味さの問題などの人生そのものの問題、そういう問題が自分ののつびきならぬ問題となる時、自分の力や知性の限界を知らされ、阿弥陀仏の不可思議な大悲の仰せをふたごころなくたのまざるをえなくなるのです」

G 「では、聖人が（小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闍提みな回心して、ひとつあじわいとなるがごとし）と仰せられるお心は」
D 「小聖は小乗仏教の聖者、

凡夫は聖者ではない煩惱具足の者、五逆は凡夫の中でことに悪の重い者・謗法は仏法を謗つてかえりみない者・無戒は戒律を持たない者・闍提は仏法を信じない者など、善人悪人それらがみな、みずからの心をひるがえして弥陀の本願を信ずれば、同じ弥陀の大悲をたのむ真信心に入り、同一の大悲の真実を味わうことになりましょうし、やがて弥陀の浄土に生まれて同じ無上涅槃の法味を味わうのでありましょう。それはちやうどどの川の水も海に入ると一つの味になるようなものである、といわれるのです」

G 「善人悪人どのようなものも、共に弥陀の本願に助けられて、弥陀の一つ浄土に生まれて仏となるのは、さまざまな川が大海に流れて同一の海の水になり同一の味になるようなものだといわれるのですね」
D 「ええそうですね」（了）

信心夜話

《松並念仏語録に聞く》二十八

太字が松並松五郎師の言葉。

○ 軒にたたせた 乞食でも
長くまたせば 気の毒や
久遠劫来 待たせたる
親をあわれと 思わんか
親をあわれと 思うなら
ああじゃこうじゃをふり捨てて
南無阿弥陀仏と泣きやしやんせ
親も助かる 子も楽や

（この歌も非常に胸をうつ。幼い頃、たまたま家の前に乞食がものをもらいに来て、家の前に立っているのを見たことがある。ぼろ着を身にまとい、髪も肌も汚れていかにも哀れである。

そんな乞食が物をもらうために、雨のふる軒の下で施しを待っている。しかし、家の者はなかなか出てこない。それでも雨のしとしとふる寒い中でじつと耐えて乞食は立っている。乞食に施しをするにしても、あまり長く寒い中で待たせているのは気の毒である。

しかるに久遠劫来、長々と待たせに待たせてきた御方、それが如来法蔵様である。如来法蔵様は私たち一人一人を生死の苦海から助けて浄土に生まれさせたいと願いを発し、長い長い御修行を私に代わって難行苦行なして下さった。そして

《真宗入門講座》

（お勤めのおけいこと法話）

毎月十八日（午後六時半始）

担当（副住職） 土井尚存

私を仏になして下さる功德をすべて完成して、これを南無阿弥陀仏として私に与えるべく、南無阿弥陀仏として、私に喚びかけづめでまします。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、助けるぞ助かるぞと、久遠劫来というほどに長々と喚びづめに喚んで下さってきたのである。どうかこの南無阿弥陀仏を受け取ってくれよ、これ一つで助かるぞと、私どもが南無阿弥陀仏を受けとってくれることを待ちに待って下さっていたのである。その喚び声、その待ちたもうみ親のやるせなきお心が、今日に出て下さる南無阿弥陀仏の念仏の声。阿弥陀様はなんとまあ、長い間待ち続け、寄りそい続け、どうか聞かせたい、あいたたい、親子の名告りをしたい、救いたいと、私に寄りそい続けて下さってきたことか。「どうか助ける親がここににいることに早く気づいてくれよ」と、喚び続けて下さる。にもかかわらず、そのうとも知らず、娑婆のことにばかりに心が向いて、久遠の親のましますこと、喚び続けて下さっている大悲の親に気がつかず、今まで流転に流転を重ねてきた。如来法蔵様を待たせ続けてきたのである。生死の家の軒に長々と立たせ続けてきたのである。それほどまでに待たせ続けたもうみ親をあわれと少しでも思うなはずぐにも、この南無阿弥陀仏様が助けて下さる親様であったかといただきな

れ、との善知識のおすすめ。やつと阿弥陀仏のみ言葉を聞く身になっても、なお仏の大悲の仰せに対して、（ああじゃこうじゃ）とだだをこねている。橋慢の（ああじゃこうじゃ）をやめて、それをふりすてて、南無阿弥陀仏はこんな私のためであったかとそのまますつと受けとるばかり、聞くばかり。そこまで念うて下さっている大悲に感泣するとき、はからずも阿弥陀様とのあい起り、仏心大悲は我らの心に至りとどいて下さる。それでやつと如来様は安堵される。それまで如来様のお心は休まらない。やつと気がついてくれたかと親が安堵し、私たちも仏のお慈悲に満足する）

○ にげてまわりて

いまははや
おさめとられて
なまわたる
はなれのねやで
かあさんに
だかれてねんね
あさがきた
みんなであそぶよ
きょうもまた
ときおりきこえる
子もりうた

（松並さんの最晩年の歌である。仏教用語は一つも使わずに、真宗の信心による温かい人生生活の味わいが実に豊かに表現されている。

（にげてまわりて）とは、阿弥陀仏にあうまでに、どれほど阿弥陀仏の大悲の中にありながらそうとも知らず長く逃げ回ってきたのであるうか。それが今はからずも阿弥陀仏の撰取の大悲に抱き取られて、南無阿弥陀仏ナムアマミダブツと鳴きわたる、すなわちお念仏申す生活となった。この世の片すみの小さな部屋で阿弥陀様に抱かれての生活。阿弥陀仏の中で寝、阿弥陀仏の中に起きる。唐の傳大士の言う「あさなあさな、仏ともにおき、ゆうなゆうな、仏をいだきてふす」のおもむきである。阿弥陀仏の大悲の中で、さまざまな人との交わり、つぎつぎとやってくる日々の事象に遊ぶ人生である。そんな日々にはしばしば聞かせて下さる母の子守歌、南無阿弥陀仏の親の子守歌。松並さんにとってお念仏の声は、阿弥陀様が抱いている赤子に歌う子守歌のように感じておられる。親子の情、仏と子の親しい情がなんと濃厚であり、あたたかであろうか）

《住職雑感》

九月三十日の朝、仏前でお念仏をしていた時、ふっと「聞名仏教」という言葉が頭をよぎり、寺報の題を早速これに変更することに決めた。生涯かけて一筋に、御名を称え、誓いの御名を聞きつけながら、世間で働らいていく聞名一路の仏教がまさに浄土真宗であろう。誰でもこの単純な道一つに入れば必ず助かるとさえ私は思っている。